天竜川激特事業の多自然川づくり

平成 26 年度 モニタリング調査結果

天竜川上流河川事務所では、平成 18 年 7 月の豪雨災害を受け、再度の災害防止を図るため辰野町から伊那市の天竜川において、激甚災害対策特別緊急事業（通称：激特事業）を行ってきました。

激特事業では、多自然川づくりアドバイザーからの指導・助言や地域からの要望を工事に反映し、伊那谷名物のザザムシやアユに代表される、良好な河川の自然環境に配慮しつつ工事を実施し、平成 22 年度に完了しました。

工事後、当該事業が環境に与える影響を把握するため、事業区間においてザザムシやアユの生息状況をモニタリングしています。

平成 26 年度のモニタリング調査結果をお知らせします。

調査の内容

- ◆ アユの生息状況：　6 月～ 8 月にかけて月1回
- ◆ ザザムシの生息状況：　12 月・2 月に各1回

調査地点

明神橋付近

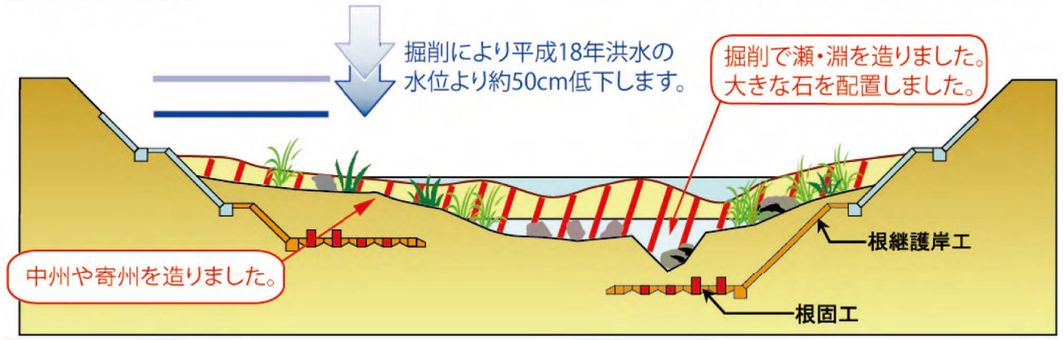
天神橋付近

北島付近

多自然川づくりの取り組み

◆ 瀬・淵への配慮

※平成 22 年度に全工事を完了しています。



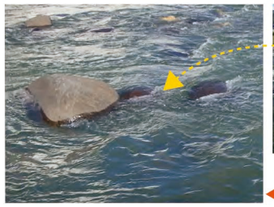
※根継護岸工・根固工：洪水時に堤防や河床を守るための、玉石張コンクリート及びコンクリートブロックによる補強です。掘削した土砂は、公共用地の造成等に有効活用しました。

◆ 瀬・淵への配慮

瀬や淵のできるように施工をしました。アユやザザムシなどの水生生物のすみ場所となります。

◆ アユの生息場所の創出

川の中に大石を置くことで流れに変化をつけ、アユをはじめとした魚類のすみ場をつくりました。石の表面はアユの餌（付着藻類）の生育環境にもなります。

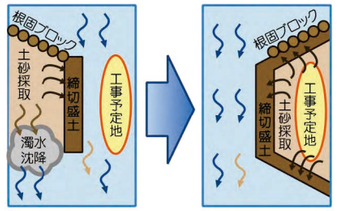


▲変化のある流れ

◀設置した大石

◆ 濁水対策

土砂採取を行う場所の上流に根固ブロックを置き、土砂が流れ出さないようにし、近くから土砂を集めることとするなど、手順を工夫しました。



●天竜川の冬の風物詩「ザザムシ漁」

伊那地方では、幼虫の期間を川底の石の間にすむ　ヒゲナガカワトビケラなどを「ザザムシ」と呼び、古くから佃煮にして食べてきました。

食用とするザザムシを採る「ザザムシ漁」は、伊那地方の天竜川で行われている伝統的な川漁です。冷たい川底からザザムシを採るようすは、天竜川の冬の風物詩であり、川の資源を有効に利用した、すばらしい文化といえます。

ザザムシの佃煮

ザザムシ漁のようす

今後も川の状況を見守り、少しでもよい方法を探して、「いい川づくり」を目指します。

豊かな水辺づくり・河川事業のことなら

笑顔、きらきら、天竜川。

天竜川上流河川事務所

〒 399-4114　駒ヶ根市上穂南 7-10
tel　0265-81-6415　　fax　0265-81-6420
最新の情報を知りたい時は…
URL　http://www.cbr.mlit.go.jp/tenjyo/
E-mail　tenjyo@cbr.mlit.go.jp

【平成27年3月作成】

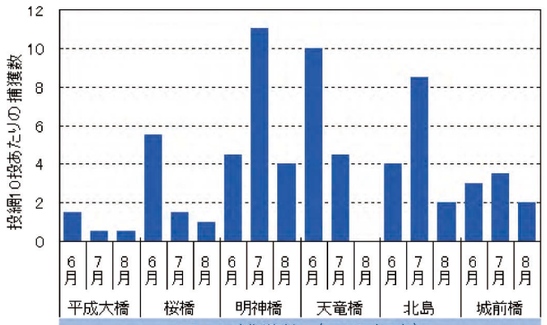
アユ調査の結果

◆平成 26 年度のアユの捕獲数は、アユ漁の解禁直後の 6 月から 7 月に多く、8 月には全体的に減少する傾向がみられました。

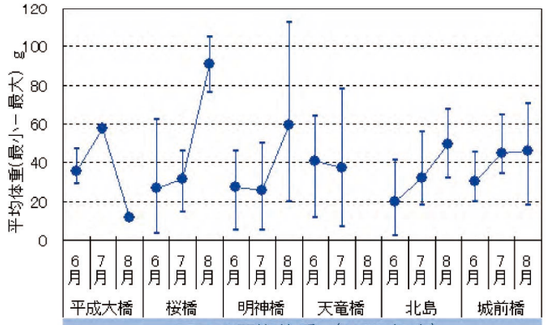
◆アユの平均体重をみると、6 月調査時には 20 ～ 40g に満たないアユが多い状況でしたが、8 月には 100g を超える個体もみられるようになりました。

◆アユの捕獲数の経年変化をみると、平成 26 年度の捕獲数は平成 21 年度～ 25 年度に比べ 6 月の捕獲数が全体的に少なく、7 月以降は例年並みかやや多い地点もみられました。

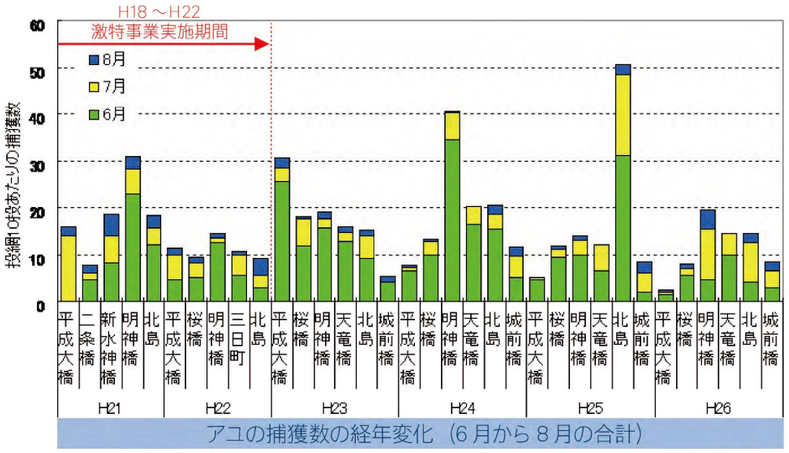
◆アユの釣果については、天竜川漁業協同組合によると、平成 26 年度は梅雨のような天気か渇水状態が多かったため、例年と比べると釣果があがっていないとのことでした。



アユの捕獲数（H26 年度）

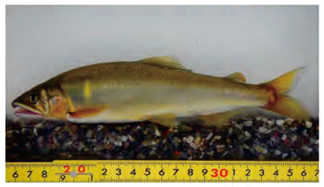


アユの平均体重（H26 年度）



アユの捕獲数の経年変化（6 月から 8 月の合計）

調査のようす（投網）


捕獲したアユ

◆その他魚類の確認状況

調査時には、ウグイやオイカワ、アマゴなど、アユを含め 18 種の魚類を確認しました。

平成 24 年度に全地点で確認されたコクチバス（※特定外来生物）は、平成 26 年度は明神橋、北島、城前橋の 3 地点で確認されました。コクチバスは、在来魚を食べるなど生態系への悪影響が心配される外来魚であるため、今後も注意が必要です。

アマゴ

オイカワ

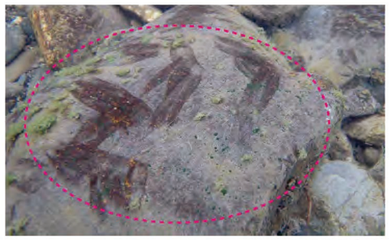
※コクチバス

※特定外来生物：もともと日本にいなかった外来生物のうち、生態系などに悪影響を及ぼすものとして法律で飼養・運搬等が禁止されている生物のことです。

◆アユの餌のようす

アユは、石の表面に生える付着藻類を餌としています。これらは大水が出たりするとはがれてしまいます。

付着藻類は、平成 26 年度調査では、6 月、7 月に多く、8 月には少ない傾向がみられました。

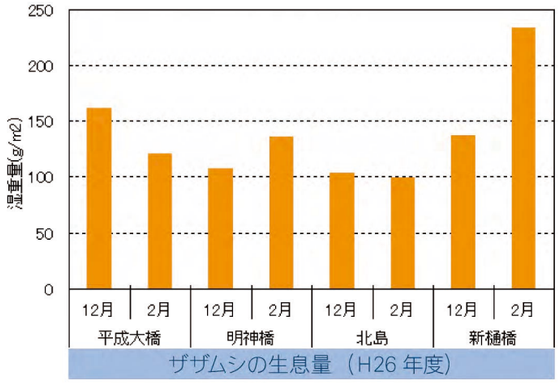

アユのはみあと

ザザムシ（ヒゲナガカワトビケラ）調査の結果

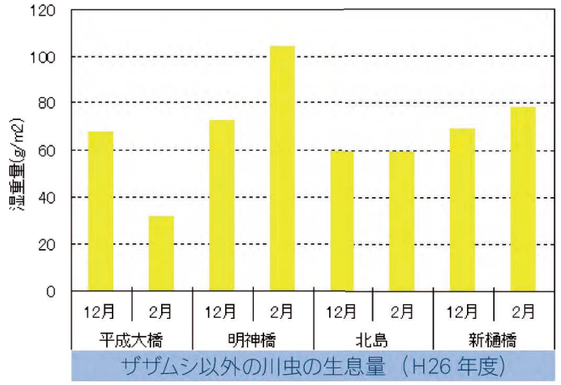
◆平成 26 年度調査では、ザザムシの生息量は各地点でおおよそ 100 ～ 150g/m2 程度で、地点間で大きな違いはみられませんでした。

◆ザザムシの生息量は、平成 25 年度の調査結果と比較すると、全ての地点で増加傾向がみられ、総量では平成 20 年の次に多くなりました。

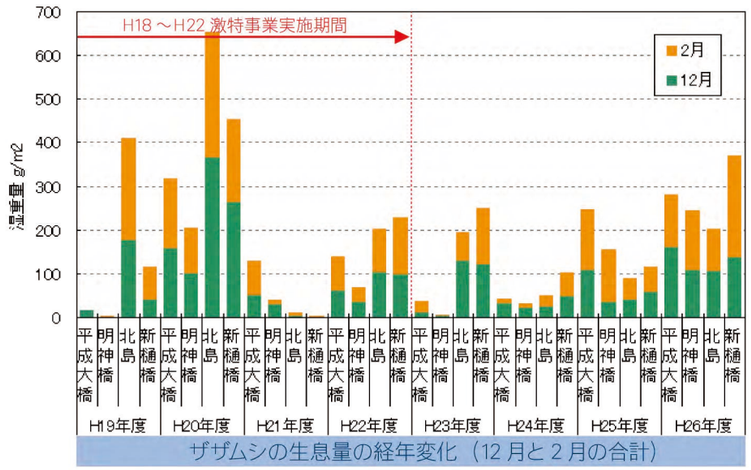
◆平成 26 年度のザザムシ以外の川虫（ヘビトンボやカワゲラなど）の生息量は、平成大橋でやや少なく、明神橋でやや多い状況でした。



ザザムシの生息量（H26 年度）

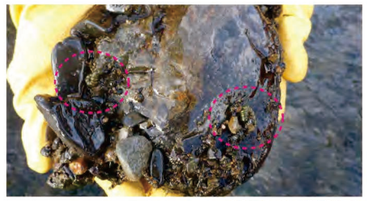


ザザムシ以外の川虫の生息量（H26 年度）



ザザムシの生息量の経年変化（12 月と 2 月の合計）

調査のようす


採取したザザムシ

※生息量：この調査では、1m×1m の範囲を決めて川底の底生動物を採取し、その重さ（g）を水分を含んだ状態（湿重量）で測っています。

◆天竜川でみられる底生動物の特徴

食用とするザザムシを採取する「ザザムシ漁」は、主に 12 ～ 2 月の寒い冬の時期に行われます。

天竜川で実施した「河川水辺の国勢調査（底生動物調査）」においても、ザザムシなどの底生動物の量（1m×1m 枠内で採取された個体数）は、夏に比べて、冬から春にかけて多いという結果が得られています。

また、底生動物のなかでも、天竜川ではザザムシ（ヒゲナガカワトビケラ）が多くみられ、平成 26 年度調査では、生息量（総量）の約 57%～ 80%をしめました。

ヒゲナガカワトビケラ

ヘビトンボ

カワゲラ